

水稻のプロ口に提案
内野職員が現在取り組んでいるのは「スマート農業機械による水稻栽培の実証試験」です。



御殿場地区の主幹作物である水稻



生産者と意見交換する内野職員(左)



雑草を抑制するロボット(中)で化学農薬低減へ



水位センサーで水管理作業の省力化

水稻のプロ口から勉強
内野職員は、御殿場地区で水稻を担当して10年目になります。「ごてんばこしひかりの生産者は高い技術を持つ米作りのプロ集団。生産者の皆さんから勉強させてもらっている」と話しました。

御殿場営農経済センター
地区営農課
水稻担当
うちの みさと
内野 美里

農業系大学を卒業し、営農に携わりたくJAに入組して12年目。2年間の金融窓口担当後、営農部署に配属となり、今年で水稻担当10年目。経験豊富な水稻生産者から学び、提案型の営農指導を行う。

ごてんばこしひかりのさらなる付加価値向上と省力化に挑戦

農業機械導入した場合、どの程度の環境負荷軽減や作業の省力化になるのか、収穫量の増減はあるのかなどを行政と共同で調査しています。

その中で、昨年度から実証試験で検証しているのが、水田の雑草の発生を抑制するロボットと水田の水位を自動測定し、入水を自動管理するゲートです。

結果、入水ゲートは毎日のほ場巡回が週二回に軽減されるなどかなりの省力化が図れました。雑草抑制ロボットは、ほ場地形による作動不良や収量減少などの課題も見られましたが、改善できれば有機栽培の有効な手段と見込めます。

スマート農業で技術を後世へ

内野職員は「生産者に提案するには、まずは検証が大切。確実なデータに基づいた提案を心がけています」と話しました。

今後、内野職員が手がけたいのは、高い栽培技術を持つ生産者の技をデータ化すること。「IT機器が未だ進歩的時代は経験や勘に頼っていた人が、水位や温度管理などデータ化高品質栽培のマニュアルを作れる」と強調。「兼業の後継者や新規就農する人とデータを共有し、品質と所得の向上を図りたい。スマート農業の活用は重要」と意気込みました。



〈特集〉 JAふじ伊豆の営農支援

~組合員に寄り添い課題と向き合う~

JAでは、令和5~6年度にわたる2か年計画・自己改革工程表の重点取り組みに生産基盤「産地の維持・拡大に向けた農業振興の強化」を掲げ、農業所得の向上に取り組んでいます。

各地区・本店には営農アドバイザーをはじめ営農担当者が農業所得の向上に向けて、

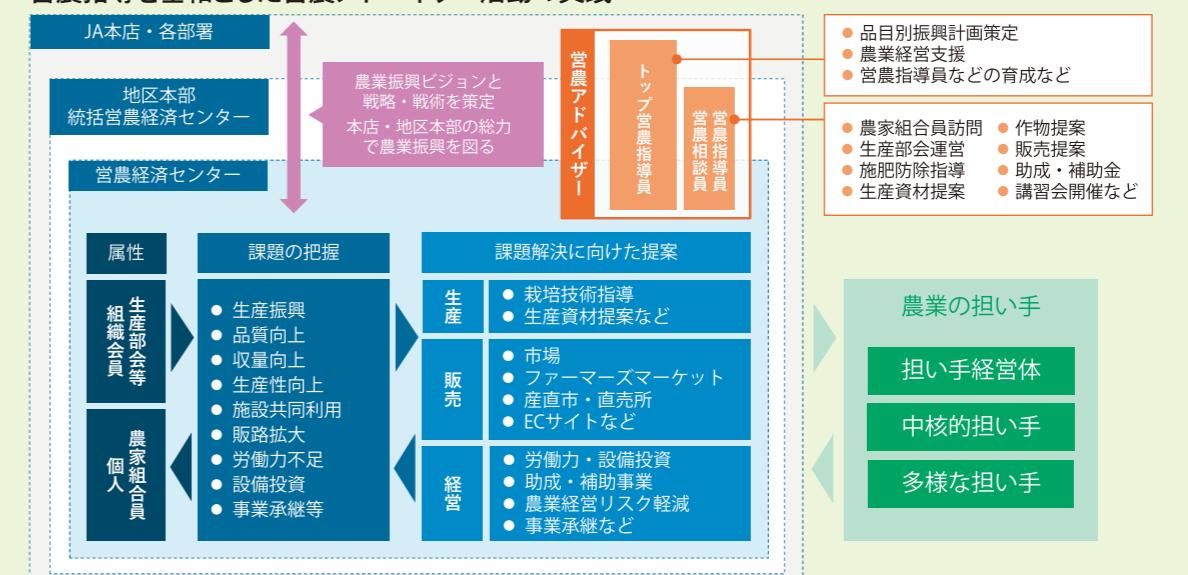
組合員に寄り添い課題解決に向けて取り組んでいます。

年度末には営農アドバイザーラが一人1課題発表報告会を行い、

これまでの成果と課題を発表し、情報を共有しています。

今回の特集では昨年度末に行われた同会から3人の発表を取り上げます。

営農指導を基軸とした営農アドバイザー活動の実践



営農アドバイザーを通じた営農支援
営農アドバイザーの3階層体制により、地域特性を生かした産地化を目指し、産地全体の生産力を高め農家組合員の農業所得の向上に取り組んでいます。

